

地球の間借り人

新井 満

作家

人口カードというものをご存知だろうか。名刺よりもひとまわり小さな長方形で、厚さは4ミリあまり。一見すると電卓のようであるが実はこのカード、内部に組み込まれた予想人口増加率の算式によって、現在と2020年までの人口を瞬時にはじき出す。つまり、世界の総人口と世界165か国の国別人口を分刻みでデジタル表示する人口時計なのである。

「激増する世界人口への関心と理解を深めてほしい」

という趣旨で国連人口基金(UNFPA)がこれを作った。1960年の世界人口は約30億人であったが、1974年には40億人を越え、1987年には50億人をも越えてしまった。ために人口カードのキーを押してみると、現時点での世界人口は54億697万6602人と出た。この原稿を書き始めた時の数字と比べると、30分ほどの間に8千人強の人口が増えたことがわかる。

毎秒3人、1分で百数十人、1日25万人、毎年1億人の割合で世界の人口は増えてゆく。リセットボタンで西暦2020年1月1日水曜日の世界人口を調べてみよう。87億9280万9449人。世界人口が百億人を突破するのはまさに時間の問題なのである。

そもそも私が作家になったのは、そう昔のことではない。5年ほど前、ミクロネシアへ環境ビデオの撮影に行った折、珊瑚礁の海で缶ビールの空缶を拾ってしまった。それが小説を書き始めるきっかけとなった。

世界一美しいといわれる海に缶ビールを捨て

た犯人はキツネでもタヌキでもない、人間であろう。世界の自然環境破壊の犯人はわれわれ人類なのであって、それに拍車をかけているのが人口爆発ということになる。

初めて月へ行ったNASAの宇宙飛行士が宇宙船の小窓から、だんだん小さくなってゆく地球を眺めながらこんなことを呟いたという。

「最初のころ僕は生まれ故郷テキサスのことばかり考えていた。しばらくたつと生まれた国アメリカ合衆国のことを考え始めた。しかし最後の最後には、自分の生まれた星、地球のことしか考えてなかった……」

これを鳥の視点という。あるいは宇宙の彼方から自分と自分のまわりを省察したという意味に於て、人類が初めて獲得した“宇宙媒介的自己遠望”の視点と言ってもよろしい。

暗黒の宇宙空間に浮かんでいるエメラルドグリーンに輝く水の惑星。息を呑むほどに美しい。と同時になんと小さな星なのだろう。

こんな小さな星の上で、誰かが誰かを憎んだり戦ったりして何の益があるというのか。そしてそもそも宇宙から遠望すれば、人間は決して地球の主人公ではない。キツネやタヌキや鳥や虫や魚や花や樹木や、そのほか無数の様々な生きものたちと同じように、地球という小さな借家に間借りしている間借り人のひとりに過ぎないということがわかってくる。

他の生物たちとの共生を真剣に考えなければ、大家さんから追放される日もそう遠い将来ではないような気がしてならない。